

松井家孝氏のご逝去をいたむ

本学会の「ロックフィル材料の試験と設計強度」編集委員会委員長および「粗粒材の現場締固めの評価に関する研究委員会」委員長などを努められ、平成元年には創立40周年を記念して、土質工学会功労章を受けられた電力中央研究所松井家孝耐震部長は、平成2年3月17日午前8時54分、白血病のため慶応病院で逝去いたしました。



松井氏は昭和12年12月4日、満州国ハイラルでお生まれになり、帰国後は東京の牛込で育ち、昭和37年に東京大学工学部土木工学科を卒業され、電力中央研究所技術研究所に入所されました。大学で土質力学の世界的権威であられた故最上武雄東京大学名誉教授ならび渡辺隆現武蔵工業大学教授に師事され土質力学を学ばれました。

当時我が国の電力会社は大規模揚水発電用の大型フィルダム建設を陸続として進めていました。

若さと情熱に満ちた松井氏は、電力中央研究所に入所以来フィルダムの堤体材料の力学特性の評価、フィルダムの基礎処理や安定解析の研究に精力的に取り組まれ多大な成果を挙げました。この間、松井氏がかかわった日本のフィルダムは新冠、高瀬、馬瀬、喜撰山、南原、稲村、天山ダムなど日本全土にわたる20数個の主要なダムに及び、調査、材料試験、設計を通じこれらのダムの完成に大きな貢献をされました。

昭和50年代に至り原子力発電所の建設が盛んになり、原子力発電所の地盤の安定性の評価に必要な地質・地盤の調査・試験法の体系化に取り組み、土木学会の活動を通じて国の安全審査の内規の骨子となる成果をとりまとめました。さらに、昭和56年頃から電力中央研究所が我が国の原子力発電所の立地難の解決をはかるために着手した新立地技術の研究では、その一つである第四紀地盤立地のリーダーとして研究の推進に努められ、10年にも及ぶ広範かつ総合的な研究を指導し平成2年漸くその集大成を見るところでした。

この間、電力中央研究所で松井氏は、昭和54年には土質研究室長、昭和62年に立地部次長、昭和63年に耐震構造部長として、常に日夜をいとわず研究の推進と若手研究者達の指導育成に精力的に努められました。また土質工学会などの学協会の活動も繁忙の中で積極的に行われ、創立40周年を記念した第24回土質工学研究発表会の講演部会長として発表会の成功に貢献するなどのご活躍をなされましたが、既に昭和58年頃から松井氏の骨髓は病魔に蝕まれていたようです。

一方、仕事を離れますと、若い頃の松井氏はベルリンオリンピックの馬術競技の日本代表選手であった父君ゆずりの頑強な体で、学生時代以来サッカーを好まれ、一試合で3得点をするといったストライカーでしたし、最近では仕事の合間にゴルフを楽しんでおられ、今でもあのパワフルなドライバーショットが目の当たりに思い起こされます。

松井氏は耐震部の部長として、第四紀地盤立地研究のリーダーとして、また電力会社や学協会の数々の委員長や委員として大活躍されている折に病に倒れられ遂に世を去られました。研究半ばにして世を去られる御無念はいかばかりかとお慰めする言葉ありません。

また最愛の奥様、息子さん、娘さんを残されどんな言葉をもってしてもお慰めできないこととは存じますが、ただひたすら、松井氏の終わりなく長い旅路の平安をお祈り申し上げます。

(電力中央研究所 我孫子研究所 副所長 江刺靖行)